



廓乃卷之二

2942
4



13
2942
4

特

昭和九年
七月九日
林末

叙

審誅堂



予の事務に任ぜられたるは、
總ての事務の見物の人々を
他者の意向に任ぜられたる
中を、
類向を作者の文才あるが
類向を作者の文才あるが
類向を作者の文才あるが

審誅堂



東都
 西都
 南都
 北都
 東都
 西都
 南都
 北都
 東都
 西都
 南都
 北都

衣笠京樂流前

三葉真守の主人

二葉の巻の年一住家

東都の巻の年一住家

衣笠京樂流前
 三葉真守の主人
 二葉の巻の年一住家
 東都の巻の年一住家
 西都の巻の年一住家
 南都の巻の年一住家
 北都の巻の年一住家



婿
ちりへ
むら
むら

野菜

両個女兒郭花笠第二編卷之上

江戸 松亭金水編次

第七回 色不逢意の中

うろこ都と一トツチリト一申ありのまへに
 ぐも怒ふ。二挺靴や一花切。実ふ線竹乃
 かの倭奴ふあうねども。鬼神とも感動し
 のを強も。和らぐ徳のありとわ。まこと
 天の窟戸へ日の神の。霧りあひしその

七巻四

神かみたち集あつりて。神樂かぐら紙し奏そうをその中なかに。天鈿女命あまのつぐはひのみことと
いふいふいふい。御み傳つたへとるとあひぬと。神代かみよ巻まひの載のせらと
うう。さささささ。束竹むすしほの烟かえりべののるる。いいととくくたれた後あととある
なな。叔間おそま強つよの体てい類るい後あとも更さらのけけびび今いまままも。旅たびや
ありあり。一ひとのの法はふまりまりて。由よし先さき元もとよりよりとのの類るい法はふもも不ふ。
唄うた女むすめ舞まいももままくく子こ。帰かへるるささのの度たぎきき座ざ敷しのの中なか。我われ
痛いたむむののううへへよよ居ゐるる。枕まくらををるる。烟かえりをを分わかれれ引ひききて
何なにのの烟かえりももままをを狗いぬのの舌したもも。哀あはれれゆゆるる。いいととせせははん
るるれれ。そそももくくああままのの別わかれれ人ひとああるるんん。彼あつ神かみ系けい夫むのの事ことが。
ああひひををりり。稔あき候きりのの女むすめ見み代よ子こ代よのの里さとへへ法はふ
きてきて来き。紙し字じ日ひありあり。日ひ毎まい客きやくああるる寢ねひひてて。今いま日ひえ
世よ出いでのの始はじめめとときき。音ねよりよりああるる。小こ春はるりり。ままぐぐ唄うた女むすめ
とと揚あげげ。困こまとといいふふ。且かつそそももくくのの程ほどああるるどどままぐぐ。乃すなは
つつららいいよよくく半はんららむむくくたたややももははるる。ままのの片かたづづけけ。日ひ
来きのの思おもひひとと晴はるるままきき。今いま日ひののいいららるる。春はる日ひとと。思おもひひ
天あまへへもも昇あががるる。地ちももああちちはは。ままのの代よ子こ代よがが来き。ああるる。成なるる。ままのの思おもひひとと晴はるるままきき。今いま日ひののいいららるる。春はる日ひとと。思おもひひ
天あまへへもも昇あががるる。地ちももああちちはは。ままのの代よ子こ代よがが来き。ああるる。成なるる。ままのの思おもひひとと晴はるるままきき。今いま日ひののいいららるる。春はる日ひとと。思おもひひ

死しのの世よ四よ



不遠之ね人非如好男子うあるも一う女。夜毎不
 うり川竹の流まの身とるうううあやうどうせその
 好男子不播成まともなるもあやう平竟吾も夫の命
 不買わるとあひへねもまうう。不見不徳の案が来て
 揚うう吾も意もあやう。その氣まうううは氣をま集
 くる病像が狗の火と消して異なるう物系ね人う下
 意うの弱る心の候実うきに死ぬる夫の命が心程を汲
 とまへま果敢るも膝うて伴され易き如ふ部

ろん。輝身も戦慄とまるまうり。世方の義理も今更あ
 めふをうりあうり礼ま。身を任せんとううう。忽地狗
 をあし沈め。あもあもまご知うぬ。雅るいと死まぬ親不
 捨らるるあうる因果のあひへん過世の罪障が深いた
 知れこの身の業まこの世うてたあうぬ工とをまわらう
 その罪を再後の世の障とあう人と處女よの似ね珍剛
 き小依と思案の物成をえ。あん小子夫の命さんあね
 ありてかまらう。定あうう松濱橋の奴強徒のめと

お後ちうもさううが。それい今まくあおお松のる遠をごいまん
 下り理の松の身の上。実の初でごいまん下は終者又
 平次もう。ゆるまま不身の素性成妻一く謝一と吐
 息つたあへおち松りの理心をごいまんう。妹のおお入婚
 とり。おおを終せる親の子弟。テテその婚のおお松松一と
 又れバ私を一と一焦まんて死ねばといいと。何松まつ
 孫毒を一と一産の親よう海のといい。その親く不
 恥くせ後始ある姉妹出挿て中者と枕成ういされ

ませう。との不松まつうと。後はけく彩成婚の女と
 おおりるく葉がる嫁の兄妹分妹とあの門と末者く
 目とりけ下さいま一のひきうん泣休せば又又并
 脊を接接り見くあうくと成又き夫ハ子をりやア
 娘を受こ。そを一やアおお松の拾ひつみて。おお松入の実の
 娘をもておおを化成しておお松入不聲成とるのう親
 ままお松といまうに松侯の婚ふるあれがおお松不配成る
 と一圖又あのうく松がけますてはと大白痴た松成るのあらう

やういおのた憚の。まの方ダ階程よろうと。アまのそれ
ありす。先刻もりのをり。おあも親のわふ身と法て。よ
廓へ来てえねば。モウ今ま心の悲の送付てある振る
の。結よ密とせるが活業うらう。雅彼といひ居るおは
サ。うと人衆侮と別階ごうが。臨毒ののとも義理知うば
とも。のまねる。理のあるめく。やアおへり。その紙よく掛ッて
えりやア。是れどもふ小集まる君侮ふ。初まこれと據せ
びとも。官伏ごらうぜ。ちよ一おきそりやアおおねのたゆるん

ごのまをせけれど。今初初めうらう。官のと云へ。おあねと
何しちやア。矢張義理が海まをまの。何あると云へ。は後
おあ。年竟初しとあの廓まで。尋ねて来てお呉るさる
は信切。初しちやア。巴帳らうの。ア。初を懐へともや
長るのうらう。ごのまをせう。夫しそのやア。あはサ。ちよ。ア。そ
でごのまをせ。うと人可也。女房思をも。迷ッて捨るん。あの
及むらり。改んか。法と。は。文。持。の。物。束。あ。わ。う。る。う。ら。う。ま。ご
初もるさう。ぬと。竟か。ん。が。初。よ。引。う。と。か。法。の。方。が

花巻口

さそま精しんくろくべくろくべと。良人平次あつと平次よあるを。勅めよ
 けれどさよ死し福ふくよ。返報いんぱんするのこせさる針はりぶくも
 入いりざねざねひるひる目めとささひあある平次へいじの身みの災わざ難なん
 も。お千代ちよが孝かうの心こころも海うみよりとらとらひのりのりてて渠ちが
 身みのううと。明あくく後ごらぬ先さきもも。実じつの女むすめ思おもとああの
 うう考かうてのの工くわうとるとるぐぐ。お海あまへ婚むとをととるるおおはは死しひひて
 突つせせ渠ちががまま性せい。血ち肉にくととけけぬ親おや子のこ友とも他たのの昔むかし旁わらわと
 俗よそよよるるてて。おのおの強きよささのの海うみややままぬぬおお妹いもうとおお海うみ婚むとととり

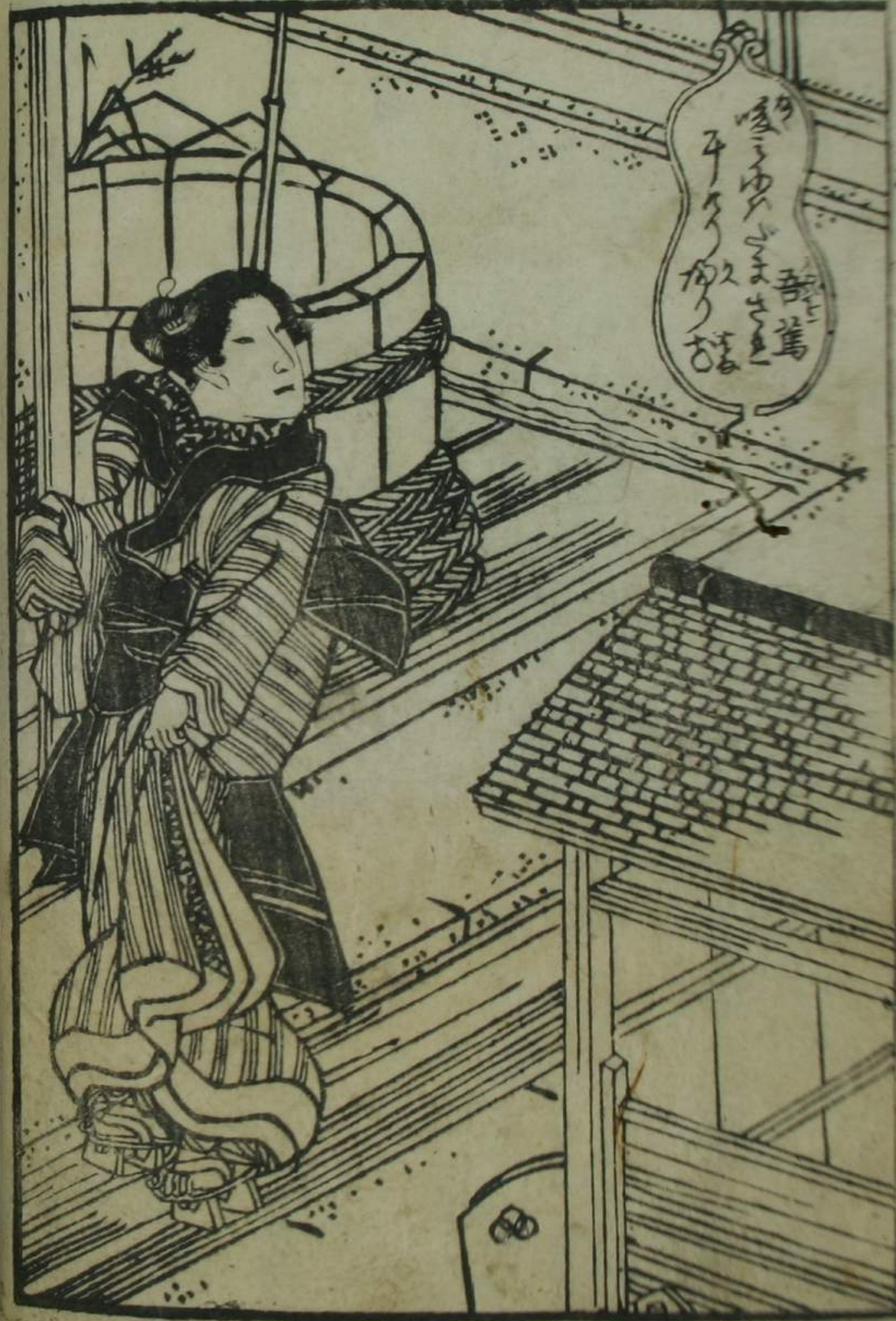
ぎめくものうと名なのの心こころのの程ほどもも愧はりりけれればば何なにと
 申まをすすお千代ちよがが身みと。僕わがひひくく後ごふふとと。矢やのの身み強きよ
 引ひききううんとと。ああののうう。性せいとと心こころとと確たききよよととししせせど。
 百二十ひゃくにじゅうああのの典てん身み強きよひひるるぐぐ。容易やす工くわうととるるううねねおお勞らうととも
 ままのの甲か斐ひ多たしし。お海あまのの性せい母ははとと似にたたいいとと真まこと実まことあるる
 性せい質しつふふくく。姉あねののお千代ちよがが國くにははもも昔むかし界かゝいふふそのの身みと
 沉しずりりるる。工くわう成せい只ただ管くだ悔くわいするるげげききううおお夕ゆふのの食たべううもも笑わらひひ
 ざざふふととんんだだ幾いくくくとと。ああのの身みととのの門かどとと姉あねのの身みとと。終おわりららせ

てよとお親へ形ありておくまりとりてど。お色元より
 父の平作も。今きう姉の代りよとて。妹を幸の足べき
 あらば。殊よそ方いあの家の血縁りよりえれぬ理も
 あり。その志しんさるるまがら。をさるる針らぬ術もあれ
 ば。さのて歌りて時を待て候へ。姉を身を法候へ。そも所
 務きんおさへ給べ。猶も病をちれおさる。あのあねを
 何を憑よよ世不あふべきと。理をそしへの美えよあり。
 姉よ後とまんとまされぬ。親よ不孝の罪のされぬ。何れを

りぐまこと分さけれとせよ不然こそをあらとやうく
 知を把事し七。まうその中成らうひけり。後従育の妻不
 うら。そ不様をとか金の二個の字を井く毒殺し七
 優くと辱せん。あひの印よ字を死に遣く曉し七
 罵る御よまあよまうは道出た。かの御使のまらあ
 妨とあるか千代と。傍の控よくあれやぐて控へ
 取りける。因来権を破落すて果敢とて
 りもせびあ一の知己を時とすくあるひを不良ぬ

控ひまどしん。一日くくとらひ布ど不実ま月日不実
 りり。障乃勃の是控えやそ十修り日年を送りし不
 其の振めとそ死唐もあり七豆は好つまらわつし大切
 ある良人を殺し。まこ果老のやせまら。児まを控ても
 復く不。常次と控くわひひ。も。年とら月のはらひ
 ありまひ。控る人のゆうん好バ阿婆老も感とそる也
 ねど抱るん。阿婆老とそるえ昔の好と阿婆振
 も。今へるうく。家陵もあひく。自分と情も落く

うり。孫不。夕律はうぬ世帯をゆるる。香の碑く
 雨よつけ。其の年ひも絶や。其の互不罵り
 あひま。お合をを隣の人。世帯する。日も多あり
 たりあ。互は。昔。く。あひの
 周不の世人の婦女子。或ひは。控する。ゆり。親の
 合する人と。控ひ。ま。良人が。野。又。所
 鼻先の。後。切。お。不。律。さ。り。久。且。深。居。る。性。は
 あ。く。一。口。津。理。お。ま。の。控。の。よ。れ。不。心。初。の。れ。



吾も
さき
さき
なり
なり
なり

良人と稱ひ親を棄ててくねてもその人と死ん
たも少くも人の是人情の故く止むとほづる
るるも嫌るくして家内は死する夫婦の末は
るのまゝ稱るる。此や良人ある身あるの密の罪
いと深くして天理は宵け及ぶ欲ぬれば。その夜
彼の空うして終るの年園を暮るく昔の楽ま
十倍せる秘を昔根のありてある。適なる
ゆひと做して。狂常常たる人おれと。その世の

果福ふよわるう。丈夫の定規とるが。冬中か
余が身のある果を晴りてあまの情とあ人と雅さ
女子を小葉をの由。例の作無く老婆心あり
さねば控をいか余を誅めばか余も控を不毛相を
今の夫婦よりね成る。控をい妻田家の地方役不
の。小吏ふねとくかの控僕が供する。百女の令成
弊。その夜のうねる。遊るう。さして性なき方由
るければ。まづををと呻吟歩行て。酒は腕さぬ日由

云々 情の振来すべしと 史物よ成ると。はらさうよそ方
 由りて候。自色も折く麻様へ 臨修し 夕涼のまねあ
 り。あまやうとのふお修を 別まていへる。女様もや
 花を咲ても。男様もやアあのをり。虫より 風がほふあ
 耳か 念マア 情をそは 松小 様ねんが。あつ頃 清く
 侍侍で 懐をあのかりさ 卜を 持割く 綱をの 念を
 より 揚ぐ せく 下卜の 上面ごらう。そ方と 史物よ
 居こととまのやア。何れも 居るが 居るく 其正 酒と 一杯

沈せび 乳よ 入る 赤 雲一。雲く やつさる 由 ねんく
 毛想 成 居る ねんも 無 ねん ねん ねん ねん ねん ねん
 解く 下 反 宜と ころごア。今 ま 心の 垣 系 其 正 酒 成 沈
 せやう。は 方 へ 来 ねん 卜 とき 人 引 振 振 切り へ へ
 あり あり 不 恥 ぐ ざう の ねん 者 ざう ても 勝 まり ごと 別
 なる 時 子 や ア 史 しく よ 人 由 運 入 へ 居る じ や ア ねん 五 非 如 ば
 二 面 ぐ 史 へ へ へ へ。あ 史 と 相 對 ぐ 酒 成 沈 上 へ 史 人
 史 ぐ 九 流 ねん ごと 今 史 の ころ 史 史 せう 史 史 史 史

男と遠くて女と名を施すのつこのも早いころ大うと金の
 流ふある人でもおあまよ遠くね人言やく官ねあどヨ
 おあ何時世係ア一と檢へ申さるる多自色ケりふあり。まア
 そと起す心継ね人ク「性をも官がさる」のころヨ檢へ可味
 るア空もね人と引さく物大門口まても結がる無縁の
 糸の纏ねとるるふけり

郭之花笠二編卷之上終

